

生涯学習情報紙

2022



発行：大和村教育委員会事務局・中央公民館

第345号

第10回大和村子ども議会（8/3）

8月3日（水）に、第10回大和村子ども議会を開催しました。今年度は、大和村小学校の杉島希空（すぎしま のあ）さんが議長に、また村内の小学4～6年生から7名の児童が子ども議員として参加しました。

緊張していた子ども議員でしたが、最初の登壇者の大和小の南蒼空（みなみ そら）くんが元気よく質問をしたのをきっかけに、杉島さんの議事進行で、次々と質問を行いました。答弁を村長をはじめとする各課の課長が写真等を使い丁寧にわかりやすく説明を行いました。子どもたちが、この体験で得た本村の取組や議会の仕組みを学ぶことで、大和村の将来を担う大人になればと思います。

大和っ子スクール（自然観察体験）

7月28日（木）に大和っ子スクールを開催しました。今回は湯湾岳を登山しながら動植物を観察し、奄美の自然の魅力を知らってもらう事を目的とし開催しました。

当日は村内小・中学生11名が参加。あいにくの雨模様で湯湾岳の登山を中止し、奄美市住用にオープンしたばかりの世界遺産センターの見学に変更しました。

参加した児童生徒は奄美の動物の生態に関する情報に真剣な表情で学んでいました。

今後も自然観察のみならず、大和っ子スクールでしか体験できない事を企画開催し、子どもたちの成長の一部になっていけたらと思います。



大島地区ジュニアリーダー研修会



大島地区ジュニア・リーダー研修会が、7月27日、奄美少年自然の家にて実施されました。大島管内の中学生～高校生まで22名が参加。大和村からは、大和中1年の鈴木心紘さん、勝山洸太郎さんが参加しました。ジュニア・リーダーとしての現状・課題や、組織の運営等に必要知識・技能に関する研修を受けました。



本（ふん）め読（ゆ）みい果てやねん！

ノロと豊年祭

今回はノロ、豊年祭について、『大和村の民俗』〈大和村誌資料集2 大和村誌編集委員会〉に、琉球大学の学生が2001年（平成13年）から3年間、本村で現地調査した資料が載っていたのでその一部を紹介したいと思います。

最初に「ノロ」についてです。「全奄美的にノロ祭祀をめぐる状況はまさに崩壊の一端をたどるばかりで、殆ど完全に崩壊している」という議論が既に1980年（昭和55年）代になされていた中で、1990年（平成2年）以降も神役の継承が複数行われているという事例はおそらく近年、大和以外では見られないものでした。[オムケ（ウムケ）]や[オーボリ（オーフリ）]、[キジシキマ]、[豊年祭]、[ウマレゴノガン（ウマレゴノカミサマ、マーレゴノガン）]、[フユルメ（フユウメ）]など6回の祭祀儀礼を神役たちはトネヤを祭場として行っていました。次に、大和の豊年祭についてです。「豊年祭当日には、午前中、神役たちによる祭祀儀礼が3ヶ所のトネヤで行われる。儀礼には神役のうちウミホウノカミサマを除く全メンバーと壮年団の三役、グジュヌシ（宮司の主）が参加する。ミヤーに土俵が造られる前は、毎年赤土を運び浜に土俵をこしらえ、そこで相撲を取っていた。人々の話によれば、浜だけでなく学校の校庭に土俵を造ったこともあったと語っていた。豊年祭当日の早朝、毛陣のキッキョで汲まれた“若水”はノロドネで、メンヤマから汲まれた“若水”はイチドネ（ナカノトネヤ）で、それぞれのトネヤで拝まれますと相撲の時の“力水”となる。そして、10時前後頃から神役たちが順次ノロドネに集まり始めた。皆和服姿であり、ノロドネに着いた人から次々と和服の上に「サルシ」という白い着物を羽織り、儀礼の始まりに備える。豊年祭の儀礼は、主催する壮年団の依頼で奉納相撲の安全祈願が目的の一つである。」

豊年祭は、今年の豊作への感謝、そして来年への豊作祈願を込めての行事ですが、実は奄美での農耕の定着は日本の中ではかなり遅れてのことのようです。山の幸、海の幸に恵まれていたのでその必要がなかったのでしょう。また、米やサツマイモの前に栽培されていたのは「ウム（里芋）」です。ウムをお供えるのはその名残りだと思います。これらについて非科学的だとか面倒だとか思う人も、先人の思いや世界自然遺産登録で自然とともに注目された“環境文化”を解するいい機会にする“ゆとり”はもっていいのではないのでしょうか。

